

令和8年3月26日(木) 修了式

## 根岸友山・武香に学ぶ「文武両道」

1年生240名、2年生228名の代表者に、先ほど修了証を手渡しました。修了証の「しゅう」という字は「終わる」という字ではありません。修学旅行の「修」です。この字は「おさめる」と読み、「身に付ける」という意味があります。ですから修了式とは、この1年間を通じて学習面でも生活面でも様々なことを身に付け、「私たちの成長した姿を見てください」という式なのだと考えています。皆さんはこの1年間で成長することができたでしょうか。各学年等の主任の先生に、皆さんが集団として成長した点を聞いてみました。7～11組主任の田子先生は「学習にしっかりと臨む態度と作業学習をやり抜く体力が身についたこと」、1年生の梅本先生は「先手挨拶ができる生徒が増えたこと、みんな一緒に頑張ろうと同じ方向を向くようになってきたこと」、2年生の時田先生は「日々の生活、行事など、自分たちで考え議論し、よりよいものになるように生徒自ら行動できるようになったこと」とお話になりました。学校全体でも「文武両道」の精神が発揮され、さまざまな面で大きな成果をあげました。すばらしい成長を感じることができました。

ここでは、熊谷市の偉人 根岸友山（ゆうざん）・武香（たけか）親子を話題として取り上げます。先日、皆さん一人一人に「マンガ 友山・武香物語」（熊谷市立図書館）を配付しました。読んでみたでしょうか？根岸友山は、現在の熊谷市立大里中学校付近の名主の家に生まれ、江戸から明治の時代、特に明治維新の際にも大いに活躍しました。その息子・武香は埼玉県会議長や国会議員として活躍する一方、吉見百穴など文化財保護にも大きな足跡を残しています。この親子の偉大さは、人材を育てたところにあるのだと思います。まずは自宅に、学問をおさめる漢学塾「三余堂」（わずかな余暇をも勉学に励めという意味合い）を開塾します。更には自宅内に、剣術道場「振武所」を開いたのです。いずれにも、日本有数の指導者を招き、若者の教育に努めました。その結果、熊谷を中心とした多くの若者が後の日本をリードする人材へと成長していきました。このような教育を、マンガの中では「文武両道の教育」という言葉で言い表しています。根岸友山・武香が生まれた家は保存され、歴史を学ぶミュージアムも開設されています。桜の名所でもありますから、ご家族で訪れてみるのもいいかもしれません。

先ほどの、文武両道は、富士見中学校でも大切な言葉です。昭和22年に本校が開校して以来、多くの卒業生が受け継いできた富士見中学校の精神こそが「文武両道」なのです。本校では、文武両道の「文」は授業をはじめとする「学習」、「武」は部活動・クラブ活動・習い事などをはじめとする「自主的な体験活動」とであると捉えています。この「文」と「武」は切っても切り離せない関係にあります。根岸友山・武香は、両者をつなぐものを「精神力」としています。信念をしっかりともち、困難に負けず、あきらめることなく努力を続ける力です。これは、皆さんにとってもとても大事です。「精神力」が十分でなければ、どちらも身に付かず、中途半端になってしまうのではないのでしょうか。

令和8年度も、富士見中生として、困難に負けず、あきらめることなく努力を続けることで「文武両道」を成し遂げることを期待し、令和7年度修了式の式辞とします。

熊谷市立富士見中学校長 田沼良宣